

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 遠隔接觸場面における多地点間インターアクション—台湾・日本・中国間のアクセス事例から

A Study of Multi-Point Remote Interaction in Contact Situation: In the Case of Video Connection between Taiwan, Japan and China

doi:10.29714/TKJJ.201012.0007

淡江日本論叢, (22), 2010

作者/Author：施信余(Hsin-Yu Shin)

頁數/Page：117-138

出版日期/Publication Date：2010/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.201012.0007>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



在遠距接觸情況下的多點間互動 —從台灣・日本・中國間視訊連線的實例來看—

施信余

淡江大學日本語文學系助理教授

摘要

教室內的語言學習對語言知識的獲得雖有益處，然而由於與該語言的母語者實際進行口語溝通的語言使用場合甚為缺乏，也因此一般認為要學會外語語用學上的用法著實困難。為解決這樣的難題，導入視訊會議系統於語言教學上，讓學習者身處日本以外的地方也能和日語的母語者溝通學習不失為一具體可行之道。

本篇論文首先回顧分別以日語和華語進行視訊會議¹交流的實況以及針對參加會議的學習者們所進行的訪談內容，進一步探討以視訊會議方式進行語言教學的理想狀態及難處為研究宗旨。

實際上，透過與同世代的他國學生進行交流，不但能增進參與討論的能力，當順利運用外語傳達自身想法時得到的喜悅將帶來成就感，當理解了對方的文化時得到的快樂將強化學生內在的學習動機，有利於維持一定的學習熱誠。若有計畫性的設計類似互動場合，讓學習者學習表達與理解，期能有效提升口語溝通能力。

關鍵字：視訊會議、遠距教學、互動、學習動機、學習意願

¹ 由淡江大學、日本早稻田大學、日本慶應大學、北京大學四校共同舉辦之大學生視訊會議。

**A Study of Multi-point Remote Interaction in Contact
Situation: in the case of video connection between Taiwan,
Japan and China**

Shin, Hsin-yu

Assistant professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

Learning language in a classroom has always been the effective way to get language knowledge, however, owing lacking of occasions students can make real conversation with native speakers, it is usually believed that to use a language pragmatically is nearly impossible. This situation could be solved by introducing the video conferencing system in language teaching, which allows overseas learners to have the chance to communicate with native speakers directly.

Below is the research outline: The first part will be the review of past live video conferencing² in Japanese/Chinese and also interview with participants. Following will be discussions on the advantages of language teaching by video conference and difficulties need to be overcome.

To communicate with students from different countries but in the same generation can enhance their wiliness to participate. Meanwhile, a sense of accomplishment could easily be reached if successful communicate being made. We are confident that the design and practice of communication learning forum like this can definitely improve oral communication skills.

Keywords: video conference system, remote education, interaction, learning motivation, willingness to learn

² This video conference is held by these four colleges: Tamkang University, Waseda University, Keio University and Peking University.

遠隔接触場面における多地点間インターアクション —台湾・日本・中国間のアクセス事例から—

施信余

淡江大学日本語文学科助理教授

要旨

教室習得環境は、言語知識を得るにはよいが、実際にその言語の母語話者とコミュニケーションを行う言語運用場面に乏しいため、意味の語用論的な側面の習得が困難になると思われる。具体的な解決策としては、テレビ会議システムを用いた遠隔教育を導入し、自国にいながら日本にいる日本語母語話者との接触場面を作り出す方法などが考えられる。

本稿では、淡江大学、早稲田大学、慶応大学、北京大学を結び、テレビ会議システムを使った日本語と中国語による交流の実況と学習者を対象としたインタビューの内容を振り返り、テレビ会議システムを用いた言語教育のあり方とその限界について考察することを目的とする。

実際、同じ世代の他国の学生と楽しく交流することで、討論能力の上達はもちろん、学習言語を駆使し自ら意図したことが相手に伝わった喜びは達成感へと繋がり、相手の文化を理解できた楽しさは充実感へと繋がり、結果的に学習が内発的に動機づけられ、学習意欲が持続していったことがわかった。このようなコミュニケーションの場を計画的に設定し、「表現したり理解したり」する活動を行うことにより、コミュニケーション能力の育成に繋がると考えられる。

キーワード：テレビ会議システム、遠隔教育、インターアクション、学習動機、学習意欲

遠隔接触場面における多地点間インターアクション —台湾・日本・中国間のアクセス事例から—

施信余

淡江大学日本語文学科助理教授

1. はじめに

外国語環境で学ぶ場合、その言語は実際の生活では用いられていないため、「教室習得環境」での学習となるのが普通である。外国語環境で言語を習得する際、どのような部分が環境的に不利であり、それはどのようにすれば克服できるかということを考察するには、様々な環境要因が言語習得にどのような影響を及ぼすかといった研究がその手がかりを与えてくれるであろう。

例えば教室習得環境は、言語知識を得るにはよいが、実際にその言語の母語話者とコミュニケーションを行う言語運用場面に乏しいため、意味の語用論的な側面の習得が困難になると思われる。具体的な解決策としては、テレビ会議システムを用いた遠隔教育を導入し、外国語環境にいながらにして学習言語の母語話者との接触場面を作り出す方法などが考えられる。

本研究では、台湾の淡江大学、日本の早稲田大学、慶応大学、中国の北京大学を結び、実際にテレビ会議システムを使った日本語と中国語による交流の実況と学習者を対象としたインタビューの内容を振り返り、テレビ会議システムを用いた言語教育のあり方とその限界を考察することを目的とする。

2. テレビ会議及び教育への応用

2. 1 テレビ会議システムの活用について

テレビ会議は、インターネット回線や電話回線などを利用

して、離れた地点にいる者同士が、リアルタイムに映像や音声をやりとりしながらコミュニケーションすることである。テレビ会議システムは一对一の双方向のやりとりを前提とするが、最近では多地点で複数の参加者によるテレビ会議も可能となってきた。

通信回線が整っていれば、国内はもとより外国ともテレビ会議を利用して、情報を入手したり双方向のコミュニケーションをしたりすることができる。学校においては、専門家による「遠隔授業」、交流を含めた他校との「共同学習」の媒体として学習においても大いに利用することができる。

テレビ会議を利用した授業を組み立てていく上で、「参加者」「相手」「授業形態」の三つの要素がテレビ会議を利用した授業を構成すると考えられる。「授業形態」については、大きく「遠隔授業」と「共同学習」の二つに分かれる。「遠隔授業」とは、専門性を持ったゲストティーチャーが、直接情報提供や解説をしながら、教室の枠を超えて学習する形態であり、教えられる側と教える側の立場が明確である。その中には、「一斉指導」と「個別指導」がある。それに対し、「共同学習」とは、参加した学習者が情報交換や質疑応答などを通して互いに学びあう形態である。その中には、交流を主とする「ふれあい」、学んだことを伝え合う「情報交流」、自分の考えを伝え合う「意見交流」、言葉や音、動き等で思いを表す「表現」、会議を主とする「打ち合わせ・相談」などがあるという（平良他 2009）。

今回のテレビ会議を行うにあたり特に意識したことは、「参加する四校にとってメリットのある交流にする」ということである。つまり、ふれあうことによってコミュニケーションへの関心・意欲を高めるというだけではなく、ふれあうことによりメリットを感じてもらえるような「共同学習」を目指し、研究に取り組んでいる。

2. 2 テレビ会議の長所及び予想される問題点

今回実施したテレビ会議では、同年代のアジア青年が日常的なテーマについて議論し、「相互理解の促進と、母語または学習言語による運用力・発信力の向上」を目指している。こういったテレビ会議システムを用いた際の長所、また予想される問題点について表1にまとめてみた。

表1 テレビ会議の長所と予想される問題点

長所
<p><u>1. 学校内だけでは得られない情報の入手、人との出会いがあること</u></p> <p>テレビ会議システムにより、離れた地域の人々と交流することができる。それにより、異なる土地に住む人の思い、考え、生活、文化などの情報を得て、視野が広がり、新たな学びのきっかけになるであろう。</p>
<p><u>2. コミュニケーションへの関心・意欲が高まること</u></p> <p>同じ空間での学習と違い、テレビ会議での学習は画面上での交流になる。画面上であるからこそ相手に対する興味や関心がわき、もっとやりとりしたい気持ちや、もっとわかりやすく伝えたい気持ちが生まれ、コミュニケーションへの関心・意欲が高まるであろう。</p>
予想される問題点
<p><u>1. 参加者全員に参加意識を持たせることが難しいこと</u></p> <p>司会や発言者以外はその場にいるだけの状態になりがちで、課題意識が薄れてしまう可能性がある。</p>
<p><u>2. 通信回線の状況に左右されやすいこと</u></p> <p>通信環境や回線が混んでいるなどの状況により、映像や音声もうまく伝わらず中断を余儀なくされてしまうことがある。</p>
<p><u>3. 時間の調整が必要であること</u></p>

外国とのやりとりでは時差の問題が生じることがあるため、時間の調整が必要である。

4. 時間がかかること

タイムラグの関係で発言と発言の間に間が空いたり、カメラワークに時間がかかったりする。また、音声や画像がうまく伝わらない時には聞き直しが必要となってくるため、時間がかかる。

テレビ会議だけを用いるのではなく、電話、電子メールや掲示板、ビデオレターや手紙など、時と場合、相手に応じてそれぞれの良さを生かした「選択」や「組み合わせ」を考えれば、問題点を解決することができ、テレビ会議の持つ長所が生かされると考えられる。

本研究では、母語が異なり、異文化を背景に持つグループ間による、非正規授業³での「共同学習」という形態を取り入れた数回にわたる遠隔交流を観察対象とし、そこに現れる学習者同士間のインターアクションの特徴を分析することを試みる。

3. 実施状況

3. 1 実施対象

本会議（「アジア学生ネットワーク」と称する）は、学生主導の遠隔会議プログラムであり、アジア四大学をインターネットで結び、学生同士が忌憚なく意見を交換することを目的に、2002年から継続中の実践授業である。このように長期

³ 本会議への参加は、正規授業の一環として実施する学校もあるが、筆者が勤務する淡江大学では、課外活動として実施している。学期初めの頃に学部四年生を対象に参加者募集をかけた。また、リアルタイムの遠隔交流には高度な言語能力が必要とされるため、四年生のうち、特に交換留学経験者を優先させた。

にわたり定期的に外国語を使った交流ケースは少なく、異文化理解や言語習得研究の貴重な資料である。

3. 2 実施目的

日常的なテーマについて学生に深く突っ込んだ議論の場を提供し、アジアの青年の相互理解を促進すると同時に、学生主体の会議運営と会議討論に必要な日本語（または中国語）の運用力を向上させ、また母語である中国語（または日本語）による発信力を高めることは実施の目的である。

3. 3 実施期間

本研究は、筆者が台湾淡江大学側の会議支援教師を担当した期間中（2009年10月～2010年1月）合計五回の会議を観察対象とした。また、会議の様子をすべて録音、録画した。

【2009年度の参加校及び各校の参加人数⁴】

淡江大学	6名	早稲田大学	7名
慶応大学	10名程度	北京大学	3名

【2009年度前期の開催日程】（全5回）

日時	テーマ／ 討論内容	使用 言語	司会校
2009/10/29	<u>アイドル</u> ・私のアイドル ・アイドルに国境はある？ ・未来のアイドル像	中国語	淡江大学
2009/11/12	<u>いじめ問題</u>	日本語	慶応大学

⁴ 多少参加者の入れ替わりがあるため、各回の参加人数は不定である。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 中国にいじめ問題はあるか。 ・ いじめに対する周囲の対応 ・ インターネット上のいじめ 		
2009/11/26	<u>オバマ</u> <ul style="list-style-type: none"> ・ もしオバマに会ったらどんな質問をしたいか。 ・ オバマはカッコいいと思うか 	中国語	北京大学
2009/12/10	<u>クリスマス</u> <ul style="list-style-type: none"> ・ クリスマスはどのように過ごすか。 ・ 誰と一緒に過ごすか。 ・ 自国では、どんな時、若者は共に過ごす相手がいないと特に寂しく感じるか。それはなぜか。 	日本語	早稲田大学
2010/01/07	<u>私を感じた貧富の差と教育</u> <ul style="list-style-type: none"> ・ 裕福な家庭で育った子どもは人より良い教育を受けられるのか。 ・ お金持ちと良い教育を受けることには必然性はあるか。 	中国語	慶応大学

3. 4 実施方法

討論テーマの決め方であるが、会議開催の一週間前までに、司会担当校の参加学生が「四校が共通の関心を有すると思われる話題」という前提条件に従ってテーマを決め、他の参加校に知らせる、というふうに行ってきた。また、他人の発言が理解しやすくなったり、自分の意見がうまく伝わったりし、会議の進行がスムーズになるよう、当日参加する学習者には、それぞれの話題についてまとまりのある意見が言える程度

の準備をしてくるよう指示した。

そして、毎回会議終了後に構造化アンケート（付録 1 をご参照のこと）に記入してもらった。アンケートには、交流がうまくできているかの振り返りや、最も印象に残った発言、会議全体に対する意見などの質問が盛り込まれている。さらに、今後の活動設計の改善に生かすために、五回目の会議の後、淡江大学側の参加者、日本語学科四年生四名にフォローアップ・インタビュー（半構造化のもの；付録 2 をご参照）を実施し、「アジア学生テレビ会議」に対する意見を伺った。収集したアンケート及び全体終了後に実施したインタビューの内容を本研究の分析対象とした。

3. 5 分析方法

フォローアップ・インタビューの質問内容は、大きく「会議そのものについて」、「会議前の関連事項」、「会議進行中の関連事項」、「会議後の関連事項」及び「今後に生かすためのアドバイス」の五つの部分に分かれている。

「会議そのものについて」の部分は、参加するきっかけ、テーマや全体のセッティングに関する質問を設けた。また、「会議前」「会議進行中」「会議後」に関しては、それぞれ、どのように事前準備をするか、理想的なインターアクションのあり方、フィードバックのし方が質問のポイントとなっている。最後に、今後の実施に生かすために改善点と評価すべきところも話してもらった。

インタビューを受けた学習者の意見をまとめる際、「KJ 法」⁵の手法を取り入れた。

⁵ 「KJ 法」は川喜田二郎がデータをまとめるために考案した手法である。データをカードに記述し、カードをグループごとにまとめて、図解し、論文などにまとめていく。共同での作業にもよく用いられ、「創造性開発」に効果があるとされる。

4. 結果と考察

以下では、淡江大学側の参加者4名を対象に実施したインタビューの内容を表にまとめる。

● 会議そのものについて
1. テレビ会議に参加するのは今回ではじめてか。 (似た経験がある場合、その会議の様子を述べるように)
→ はい。はじめての経験だったため、新鮮だった。
2. 今回のテレビ会議に参加するきっかけは？
→ 日本語による口頭練習の良い機会だと思ったから。
3. 全体のセッティングに関する意見 (参加学校数、参加人数、開催時間、開催頻度等)
→ 一時間程度の長さは外国語の練習にはちょうどいい。疲れないの がいい。
→ 時々発言の時間配分がうまくできていないため、発言権が一部の学 校に握られてしまい、意見も主観的になりがち。
4. 日本語会議と中国語会議の両方を設定したことに関する意見。
→ 半々にすれば、準備の負担がそれほど重くならないし、自分の意見 をちゃんと述べることができるからいい。
→ 両方あってよい。双方にとって外国語を用いて練習する機会が持て るから。
5. 会議のテーマが妥当かについて。もし変更できるなら、どのよう に調整したいか。
→ 易しいテーマもあれば難しいのものもある。「クリスマス」の時は楽し かった。みんな親切だったし ⁶ 。

⁶ 四回目の会議では、前半音声トラブルが起きたため、淡江大学側の音声
が他校に届かず、ディスカッションに参加できない状況だった。その際、
司会校は○×の手ぶりで答えられる簡単な質問をし、配慮し

→日常生活に関するテーマ、気軽に話せるテーマはもっとあってほしい。
→話題が難しすぎると、専門用語がたくさん出てしまう。そういった場合、十分な準備時間を与えてほしい。基本的な知識を把握するのに時間がかかるから。
● 会議前の関連事項
6. 会議前、どのように準備するか。(特に工夫することはないか)
→与えられた議題について自分の知っている情報や知識を整理しておく。ほかは臨機応変に。
→中国語会議の場合は特に準備したりはしないが、日本語会議の場合は、ちゃんとインターネットなどを使って関連する資料やニュースを調べておく。
7. 全員で事前会議を開く必要はあると思うか。
→本番の会議の15分～30分前に行うのはどうか。質問されてすぐに意見がまとまらないことがあるから。会議の直前の時間を使って同じグループの参加者の意見をまとめておくのはよいと思う。
→議題に関連する知識を事前に知っておけば、会議での意見交流がうまくいくから、特に必要はない。
● 会議進行中の関連事項
8. 会議進行中、「学生同士間の理想的なインターアクションのあり方」とは？(グループリーダーは必要か、発言権を均等に与えるべきかなど)
→議題について発言したい人は積極的に発言すればよい。しかし、発言回数が比較的少ない人には発言を促してみるのもよい。リーダーがいれば、リーダーに頼ってしまい、発言したくなくなる。しかし、人数が多い場合、グループリーダーを立て、リーダーが発言順序を決める必要が出てくるかもしれない。

てくれた。

→暗黙の了解で発言権を回したりするほうがよい。リーダーが発言指定権を握っていれば、強迫して発言させられた感じが出てしまう。仲間が発言の途中とまどったりする場合、発言権を横取りしないで傍らからサポートするよう心がけていた。
9. 教師が会議における役割とは？
→相手の発言が理解できなかったり、適切な表現が見つからなかったりする際、手助けをくれる者である。
→教師が教室にいたほうが安心して会議に臨める。
→教師がいたほうが会議はちゃんとした感じがする。突発事件が起きた際パニックにならずに続けられそう。
10. 会議の時緊張したことはあるか。自分の意見を適切に伝えることができたか。自分の意見は他の参加者に尊重されていたか。
→日本語会議の時は、緊張したりする。
→参加者の間にインターアクションがあれば、相手の反応から自身を見直すことができるからいい。
● 会議後の関連事項
11. 会議の後、振り返りやフィードバックはしたか。
→日中台三カ国の文化的相違や会議の時の様子を思い出したりする。
→会議が終わってからでも、ほかの参加者と話し合ったりする。
→特に振り返ったりはしない。
● 今後に生かすためのアドバイス
12. 学校内の遠隔教室設備に満足しているか。もし会議進行中機械トラブルがあった場合、どのように対応すべきだと思うか。
→設備はなかなかいい。小さいほうの教室が好き。技術的なトラブルには即座に対応するのは難しい。
→機械トラブルが起こった場合、○×で答えられるような質問をする、或いはしてもらおうとよい。
13. 最も印象に残ったことは何か。

→「いじめ問題」。自分には実体験はないが、討論を通して各国の間に違いがあることを実感した。深刻な話題であるほど、各国間の違いが明らかのように感じる。
→音声トラブルが印象的だった。
14. 他の参加校から学んだことは何か。
→慶応は、スピードを落として話してくれるなど、はっきりした話し方が安心感につながる。
→慶応は事前準備がよくできている。まじめだし、積極的に発言したりする。
→慶応。 慶応側の留学生はお互いにサポートしたりするように感じた。
15. 会議に参加して一番大きな収穫は何か。
→異なる文化を背景に持つ人々との交流を通して、他人の考え方を知ること。
→言語学習。特に言語運用上の学習（コミュニケーション・ストラテジーなど）。
16. 最も改善すべき点はどこか。
→発言と発言の間、間が入ってしまう。スムーズに行っていける工夫が必要。
→時間の把握。たまに発言が長すぎる場合がある。
→会議以外の時間にも交流ができるように、電子掲示板などがあればよい。
17. あなたにとって「理想的なテレビ会議のあり方」とは何か。実際参加してみて、想像したのとはどう違うのか。
→フォーマルな会議かなと思った。実際に参加してみて、身近で気楽に討論できる話題もあれば、深いテーマもあってよかった。深いテーマの時、事前に同グループの人が集まって話し合う必要がある。
→全員がパソコンモニターを囲んで会議するのかなと思った。メッセン

ジャーのように、発言する人はモニターの前に立って、音声も発言する人の分だけ届けられるのかと思った。映像も音声も全員で共有できてよい。
→ホールのような大教室とスタジオのような教室がある。スタジオのような教室の方がみんな近くに座っているから安心する。
18. 課外活動として実施したテレビ会議の長所と短所について。（正規授業の一環として実施した場合と比較して）
長所： <ul style="list-style-type: none"> ・人数が少ないため、一人当たりの発言回数が比較的多い。 ・学業成績など、教師の評価と関係がないため、リラックスして参加することができる。出来栄ばかり気にすることはない。 ・自主性が高い。
短所： <ul style="list-style-type: none"> ・拘束力が足りない。
19. その他の意見や感想
→今回はアジアの学生を中心としていた。民族性による影響にも興味があるから、欧米学生の参加を期待する。

上記の参加者意見をさらに、「討論のトピック」「トラブルへの対応」「母語による会議に臨む姿勢」「教師の役割」の四つの項目に分けてまとめる。

（１）「討論のトピック」について

上記の参加者意見からわかるように、議論のトピックは個人の日常生活に関する身近な話題が好まれる傾向がある。また、少し深刻な話題でもよいが、台日中のどちらの国の参加者にとっても関心のある話題であることが望ましいようである。その場合、事前準備がかなり必要になってくるといえる。

（２）「トラブルへの対応」について

インタビューでは接続トラブルに関する感想が多く寄せられた。お互いがストレスを感じている中、その状況に対して相手がいかに対応していたかということが強い印象として残るようである。「相手は一生懸命話しかけてくれた」「こちらの音声状態が悪くても、相手はイライラせず、こちらの様子を気にかけてくれたり、音声が途切れても討論に参加できるような工夫をしたりして本当によかった」などのように、トラブルが発生しても、相手が落ち着いて対応すれば問題が軽減されるといった感想が目立った。

（３）「母語による会議に臨む姿勢」について

母語による会議に臨む姿勢に関しては、その言語の学習者である他校の参加者にわかりやすく伝えるために、話すスピードを緩めたり、大きな声ではっきりした話し方をしたりする工夫が見られた。話が盛り上がった時にそれを忘れてしまうこともあるが、お互いにゆっくりとしたスピードであまり難しい言葉遣いをしないよう注意する場面も観察された。

（４）「教師の役割」について

会議運営の支援者である教師の存在は、会議において一定の緊張感と安心感を保つことができるなどを理由に、学習者は会議開催時における教師の存在を必要としている。また、教師の突発事件への対応能力も期待されることがわかった。

５．おわりに

５．１ 筆者が会議の実施を通して感じたこと

以下では会議運営支援教師の一員である筆者が感じたこ

とを述べる。今回会議に参加した淡江大学側の台湾人学習者は全員交換留学経験のある上級学習者であったため、「発音の正確さ」や「内容の理解度」には特に問題はなかったが、「事前準備は万全であるか」や「学習者にとって興味が持てる話題であるか」は、会議の進行に大きな影響を与えると感じた。また、「くっきり、なめらかな映像であるか」や「接続が途切れていないか」など、通信回線の接続状況も会議の進行に大いに影響するようである。

教師は、ストレスを感じることなく、目的が明確で、意味のある遠隔交流の環境づくりに力を入れるほか、学習者の参加意欲が高まるような内容設計、一回で終わってしまうのではなく、議論が深まりやりとりを続けていける工夫が必要だと思われる。また、全体連絡がスムーズにいけるよう、各校の担当教員が連絡しあう健全なネットワークづくりも、このようなテレビ会議を運営していくには不可欠であろう。

「4. 結果と考察」で述べられた結果からわかるように、実際、テレビ会議システムを通して、同じ世代の日本人学生及び中国人学生と楽しく交流することで、ディスカッション能力の向上はもちろん、互いの考えや文化などを知ることができた。それに、知的好奇心が満たされ、様々な知識が深まっていくことにより、学習動機が高まっていった。また、日本語による発話の中で自ら意図したことが相手に伝わった瞬間の喜びは達成感へと繋がり、それにより自己効力感が高められたり、中国語で日本人と会話し、日本や日本文化を理解できた楽しさは充実感へと繋がり、結果的に学習が内発的に動機づけられ、学習意欲が持続していったことがわかった。テレビ会議システムを活用してコミュニケーションする場を計画的に設定し、「表現したり理解したり」する活動を行うことにより、コミュニケーション能力の育成に繋がると考えられる。

5. 2 今後の課題

本研究は遠隔会議の実施状況や参加者の感想を報告するのみに留まったが、録音、録画データをもとに、コミュニケーションを円滑に運ぶために用いられるフィルターや協調的ストラテジーなど、異なった観点から本研究を述べることもできよう。テレビ会議システムを利用した言語教育の授業形態は、今後、日本語教育のバリエーションの一つとして、更なる発展が期待されることであろう。

付記

1. 本論文は台湾淡江大学外国語文學院 98 学年度整合型研究計画『大學教育培育日語學習者之相關研究』のうち、「教學法及指導法之相關調查研究」の研究成果である。
2. 本論文は 2010 日本語教育学会世界大会（於：台湾国立政治大学）において口頭発表したものに加筆・修正を加えたものである。

参考文献

- 呂念慈（2004）『華語視訊遠距教學活動設計：以日籍學生為例』、國立台灣師範大學華語文教學研究所碩士論文。
- 佐々木真理、熊安娜（2002）「テレビ会議による中国・日本間の遠隔共同授業「日本語」における受講者の国際理解意識の形式」、日本教育情報学会年会論文集 18、p. 59-60.
- 砂岡和子、李利津（2009）「多人数インタラクションにおける母語話者の非協調的コミュニケーション特色」、第 23 回人工知能学会全国大会。
- 独立行政法人国立国語研究所編（2006）『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』株式会社アルク。
- 早川直子（2004）「海外日本語教育機関との遠隔日本語チュ

ートリアルの試みーテレビ会議システムを用いてー」『日本語教育実践研究』創刊号、早稲田大学大学院日本語教育研究科、p.169-178.

平良悦子他（2009）「積極的にコミュニケーションを図る態度を育成する指導の工夫ー美ら島 e-net（遠隔学習システム）の活用を通してー」『平成 20 年移動教育センター共同研究』、沖縄県立総合教育センター.

宮崎里司（2002）「接触場面の多様化と日本語教育：テレビ会議システムを利用したインターアクション能力開発プログラム」『講座日本語教育』第 38 分冊、早稲田大学日本語研究教育センター、p.16-27.

八島智子（2004）『外国語コミュニケーションの情意と動機：研究と教育の視点』関西大学出版部.

付録1 構造化アンケート（中国語版）

開會日期：

討論語言：

參加學校：

主持單位：

大討論題：

副討論題：

問題					
1	對於這次的會議，你感到比較滿意的是哪個部分？(可多選)	前半部分	中間部分	後半部分	
2	滿意的深度是？(可多選)	完全滿意	大部分滿意	一般	
3	滿意的理由是？(可多選)	討論的內容很好	討論順暢	積極提問	有話可說
		能夠聽得明白	能夠相互認識	其他原因	
4	感到不太滿意的是哪部分？(可多選)	前半部分	中間部分	後半部分	
5	理由是？(可多選)	討論的內容太膚淺	語言水平差	觀點有問題	發言機會比較少
		不太能聽懂	網路障礙		
6	交流不順暢的主要原因是？(可多選)	語言水平差	文化差異	概念不同	觀點有問題
		主持不太好	網路障礙	其他原因	
7	討論內容中印象最深的發言是什麼？(自由回答)	發言單位，(如果記得)發言人			
8	理由是？(可多選)	很活潑	精彩提問	精彩追問	想法特別
		其他原因			
9	請說說對於本次會議的總體意見(自由回答)				
10	如果方便的話，請告訴我們您現在的國籍	日本	中國	台灣	韓國
		其他			
11	您的母語是什麼？(可多選)	日文	中文(含台語)	韓文	其他
12	您學習外語(中文或日語)多久了？(單選)	一年以下	兩年以下	五年以下	十年以上

付録2 フォローアップ・インタビュー質問一覧

●会議そのものについて

1. テレビ会議に参加するのは今回ではじめてか。
(似た経験がある場合、その会議の様子を述べるように)
2. 今回のテレビ会議に参加するきっかけは？
3. 全体のセッティングに関する意見
(参加学校数、参加人数、開催時間、開催頻度等)
4. 日本語会議と中国語会議の両方を設定したことに関する意見。
5. 会議のテーマが妥当かについて。もし変更できるなら、どのように調整したいか。

●会議前の関連事項

6. 会議前、どのように準備するか。(特に工夫することはないか)
7. 全員で事前会議を開く必要はあると思うか。

●会議進行中の関連事項

8. 会議進行中、「学生同士間の理想的なインターアクションのあり方」とは？(グループリーダーは必要か、発言権を均等に与えるべきかなど)
9. 教師が会議における役割とは？
10. 会議の時緊張したことはあるか。自分の意見を適切に伝えることができたか。自分の意見は他の参加者に尊重されていたか。

●会議後の関連事項

11. 会議の後、振り返りやフィードバックはしたか。

●今後に生かすためのアドバイス

12. 学校内の遠隔教室設備に満足しているか。もし会議進行中機械トラブルがあった場合、どのように対応すべきだと思うか。
13. 最も印象に残ったことは何か。
14. 他の参加校から学んだことは何か。
15. 会議に参加して一番大きな収穫は何か。
16. 最も改善すべき点はどこか。

17. あなたにとって「理想的なテレビ会議のあり方」とは何か。実際に参加してみて、想像したのとはどう違うのか。
18. 課外活動として実施したテレビ会議の長所と短所について。(正規授業の一環として実施した場合と比較して)
19. その他の意見や感想